（第３種郵便物認可）　大阪日日

大阪港を観光拠点に

あす天保山まつり

今年の目玉は舟運

活性化の原型表現へ

来年7月に開港150年を迎える大阪港。お膝元の築港・天保山地区（大阪市港区）で6日、住民手作りの「天保山まつり」が行われる。今年で9年目。官民による開港記念事業の関連イベントにも位置付けられており、地元は「まちの活性化のプロトタイプ（原型）を表現したい」と士気を高めている。（藤木俊治）

「大阪港開港150年」のロゴとデザインの最優秀作品に選ばれたグラフィックデザイナーの宮田晴之さん＝東京都足立区（右）、大阪市立工芸高3年の北野茜さん＝東大阪市（左）と吉村市長＝大阪市役所

大阪市は、築港を含むベイエリアを「世界第一級の文化観光拠点」と位置付ける。地元商店街や企業を中心に一般社団法人「港まちづくり協議会大阪」を立ち上げたのが昨年1月。天保山まつりをはじめ多彩なアートイベントを手掛けてきた。

■きっかけに

江戸時代の菱垣廻船が天下の台所と呼ばれた大坂から江戸へ米や酒を運んだ故事をもとに、市の施設に眠っていた菱垣廻船のレプリカを復元。3年前からまちづくりに生かす取り組みを始めた。

天保山まつりのパレードにも登場。地元の中高生でつくる吹奏楽隊に先導され、法被姿の子どもたちがレプリカを引き、地域の人たちと一緒に元気に練り歩く姿が秋の風物詩になりつつある。

地元の子どもたちに引かれ、大観覧車前を通過する「菱垣廻船」のレプリカ＝2015年11月、大阪市港区

「この街を知ってもらい、この街が変わるきっかけにしたい」。法人で事務局長を務める松本英之さん（52）は、地域住民と企業、商店街、官公庁が連携したまつりの意義を強調する。

■クルージング

今年のまつりの目玉は舟運だ。道頓堀を出発して尻無川を下り、大正内港を経由して大阪港に至る約1時間のクルージング。夕方には「ほろ酔いサンセットジャズクルーズ」と題し、飲食しながら夕日を眺めるコースも企画しており、市が「水の回廊を生かし、都市の魅力向上につながる」と考える舟運活性化を先取りした形だ。

横浜や神戸をほうふつとさせる赤れんが倉庫前では「大阪最速」でクリスマスツリーを点灯。中央突堤では音楽のステージ、天保山岸壁では、淀川産のウナギや大阪湾で捕れたシラスのコロッケが味わえたり、船の博覧会もあり、徹底して「海を見る」ことにこだわった。

■潜在力に期待

官民による開港記念事業の本格始動を前に、吉村洋文市長をトップとする推進委員会が6月に発足。10月には、市が、PRに活用するポスターのデザインとロゴマークの最優秀作品を表彰した。来年は、ヨットの体験乗艇やカッター（ボート）レースなども予定されている。

松本さんは「大阪が浮揚する鍵は、大阪港の活性化にあるのではないか」と期待。吉村市長もロゴマークなどの表彰式で「（大阪港を）物流だけでなく観光の拠点としても発展させたい」と述べ、潜在力に対する大きな期待感をにじませた。

◇　◇

天保山まつりは午前10時半～午後5時半。一部有料。問い合わせは電話06（6572）0017、港まちづくり協議会大阪（事務局）。